

# キスの格言

*A i r i & Y u k i*

---

春日部こみと

*Komito Kasukabe*



エタニティ文庫

## 目次

キスの格言	5
Inside story 01 唇に、恋着。	239
Inside story 02 次のキスまでの十五時間。	271
書き下ろし番外編 蕎麦 <small>そば</small> もパスタも。	313

キスの格言

## 00 髪に、思慕。

忘れられない光景がある。

世界で一番キレイで、世界で一番胸が痛む光景。

わたし、古川愛理は少々名の売れたジュエリーデザイナーだ。けれど、この職業を指したそもそもの理由は、実に情けないものだったりする。

それは、『姉から、逃げるため』だ。

わたしには双子の姉がいる。

『古川さん家の似てない双子』は、近所でも有名だった。

天使のような笑里ちゃんと、愛想なしの愛理ちゃん。

姉の笑里は美人のお母さんに似て、色白で整った容姿に絹のようなサラッサラの黒髪をしている。その美貌ゆえ、高校生のときにスカウトされ、シャンプーのCMに出演した。それをきっかけに芸能界に入り、今では日本で知らぬ者はいないほどの人気タレン

トになった。

対するわたしは、頑固で寡黙な大学教授の父に姿も中身も似た。無愛想で容姿も十人並みの地味系女子。笑里より優れているところといえは勉強ぐらいだったが、その勉強だって取り立てて成績が良いわけでもなく、地元の国立大学に入れる程度でしかなかった。

でもわたしは、大学に行かなかった。

笑里と一緒に受けた大学入試の答案を、わたしは白紙で出した。

当然わたしは落ちて、無謀だと言われていた笑里は天が味方したのか見事合格。わたしは大学を受け直さず、以前から興味があったジュエリーデザインを学べる県外の専門学校に入った。

笑里はわたしが家を出ることに最後まで反対したけど、譲らなかった。

笑里は自分たちはずっとずっと一緒に、まるで二人で一人であるかのように思っていたんだらう。

だけど、わたしはそうは思っていないかった。笑里と一緒にいるのが、辛かった。

なぜなら、わたしの恋した人が、笑里を愛していたから。

零ちゃん——萩生田零士。六つ年上の、わたしたちの幼馴染み。

お隣の萩生田さん家は、華道の有名なお家元。一人息子の零ちゃんは、ご近所でも有

名な好青年だった。眉目秀麗、品行方正、知勇兼備。まさに世の女性の理想を体現したかのような男性。母親同士が従姉妹という関係もあって、幼い頃からわたしたちの良きお兄ちゃん的存在だった。

『レイちゃん、レイちゃん！』と仔犬のようにまとわりつくわたしたちに、零ちゃんはいつだって優しく手を差し伸べてくれた。

零ちゃんは、両親以外でわたしたちを平等に扱ってくれた、初めての人だったのだ。

『泣き虫えみちゃん、意地っ張りあいちゃん』

周囲はそう言つて、わたしたちをよくからかった。

その台詞はわたしたちの性格を非常に良く捉えていたけれど、わたしはそう言われるのが大嫌いだつた。

泣き虫は『可愛い』。意地っ張りは『可愛くない』。

そんな風に言われているようで。

でも、零ちゃんはそんなわたしたちの性格を褒めてくれたのだ。

『えみちゃんは、あいちゃんを守りたくて泣いちゃって、あいちゃんは、えみちゃんを守りたくて意地っ張りになっちゃうんだねえ。二人とも、優しい良い子だ』

そう言つて、わたしたちの頭をヨシヨシと撫でる。

こんな風に、わたしたちが抱えるジレンマを、いとも簡単に汲み取ってくれる再従兄

を、どうして好きにならずにいられるだろう？

でも小さい頃は『お兄ちゃん』に対するものでしかなかった。それが『男の人』に対するものへと変化したのは中学三年生のとき。

生まれて初めて、男の子から告白されたのがきっかけだった。

高校生の彼は、毎朝同じ電車に乗り合わせていたらしく、いつもわたしを見ていたと言っていた。

有頂天になった。なぜなら、生まれて初めて告白されたからということもあるが、彼が笑里じゃなくて、わたしを選んでくれたから。わたしと笑里はいつも一緒だ。彼がわたしを見初めてくれたとき、わたしの隣には笑里がいたはずだ。それなのに、彼は笑里ではなくわたしを選んでくれた。そう思うと、自分に自信がついた。笑里は皆の特別だけど、わたしは彼にとつての特別な人だつて。

誰かの『特別』になれることが、あんなにも心の浮き立つことだなんて思わなかった。彼を大事にしたかった。彼と一緒にいる自分を、大事にしたかった。

でも――

『笑里ちゃんは？ 一緒じゃないの？』

彼の口からそんな台詞が飛び出すのは、珍しいことじゃなかった。

彼と付き合い出してから、わたしたちは別行動を取るようになった。それはそうだろう

う。わたしが笑里の立場でも、遠慮してそうする。彼はそれが不満のようだった。

でも『恋』に夢中だったわたしは、彼の言葉に含まれている意味に気づけなかった。いや、本当は彼の態度から薄々察していたけれど、気づかないフリをしていたのだ。

『だって、オレのせいで仲の良い君たちを引き離してるとしたら、悪いじゃん』  
 そう説明する彼の申し訳なさそうな笑顔を、信じたフリをしたのだ。

彼がそう言うから、と渋る笑里を説得して、今まで通り一緒に行動するようにした。彼も加えて、三人で。

そんなおかしな交際はしばらく続いたが、終わりは呆気なかつた。

彼が笑里に告白をしたのだ。

バカな男の子だった。笑里がうんと言うわけがない。

しかも、その告白はマヌケにもウチの前で行われた。家にいたわたしはバッチリと彼の告白を聞いてしまった。

ウチに遊びに来ていた零ちゃんが帰るといふから、わたしは門まで送るつもりで一緒に玄関を出たのだ。

すると、そこに困惑した面持ちの笑里と、笑里の手に組む彼がいた。

おそらく彼はわたしを送ってくれた後、その場に居続け、笑里を待ち伏せしていたのだらう。帰り際、『笑里ちゃんはどうしたの?』と訊く彼に、『笑里は委員会で遅くな

る』って言っておいたから。

『本当は、君が好きだったんだ。でも高嶺の花に思えて……愛理ちゃんを、君の身代わりにしたのは、悪かったと思ってる。双子の彼女だったら、好きになれるかもと思つた。でも、やっぱり駄目だった。愛理ちゃんの中に君と似たところを見つけたら、君を想ってしまったから!』

ガツン、と頭を鈍器で殴られた気分だった。

——やっぱり。

どうしたって、わたしは笑里には勝てない。

笑里は特別だから。わたしなんか、笑里に敵うはずないんだ。

小さい頃から抱えてきたコンプレックスが、こんなにもわたしを追いつめたのは、このときが初めてだった。今までは笑里が特別だったとしても、彼女に負の感情は抱かなかつた。でも……

——利用された。

このときわたしは、笑里への憎しみを確かに抱いてしまった。

——笑里がいなければ、こんな思いをしなくて済んだのに。

真つ黒い感情に染まってしまふ一歩手前で、バキツと鈍い音がして我に返つた。

見れば、殴り飛ばされた彼が尻餅をついている。そして殴つたららしい零ちゃんが、も

のすぐくきれいな笑みを浮かべて、指の関節をボキボキと鳴らしていた。

『——で？ その反吐へどが出そうなほど、たわけた言い分以外に、僕の大事な妹たちに言いたいことはあるのかな？』

零ちゃんは笑顔に向けていたけど、異様なまでの殺気に満ちていた。真っ青になって腰を抜かしている少年に、零ちゃんは容赦ようしやなくたたみかけた。

『笑里に告白する勇氣もなくて愛理を傷つけたくせに、やっぱり笑里の方がいいなんて虫が良すぎるよね。君、バカなの？ ああ、バカに決まってるよねえ。迷惑だから、もう二度とこの子たちの前に現れないでくれる？ 次に君の顔見たら、僕何するかかわかないよ』

相手の髪を片手で掴つかんでにっこりと笑い、小首を傾むけてみせる零ちゃんはものすごく怖かった。

彼は真っ青になってコクコクと頷うなづき、脱兎だつとのごとく逃げていった。

零ちゃんはそれを見届けた後、くるりと振り返って、困ったように眉根を寄せた。それからポンポンとわたしの頭を撫でてくれた。

『泣きなさんな。あんなしよーもない男のために、泣くんじゃない』

その言葉で、自分が泣いていることに気がついた。

『……っ、だ、だ……』

零ちゃんも見てたでしょう？

わたしは、利用されたんだ。

好きでもないのに、好きだって言われて、有頂天うちてんになった。

なんてマヌケ。なんてカッコ悪い。

自己嫌悪が一気に噴き出して、わたしはいつの間にかしゃくり上げていた。

すると零ちゃんはわたしに頭突きした。目の前に火花が散って、わたしは呻うめき声を上げた。

『……っ！ いったあ！ れ、零ちゃん!』

『くだらない涙で目を曇くもらせてないで、ちゃんと見てごらん、愛理』

そう言って零ちゃんが促うながした方向には、わたし以上にポロポロと涙を流しつつ、般若はんにやの形相で震える笑里の姿があった。

『え、えみり……!?!』

『許せないっ!! あの男、最初から気に食わなかったのよ! わたしから愛理を奪おうとしただけでもムカついていたのに! でも愛理の事を思って身を引いてやったら、愛理を泣かすなんて! ああああああ! もいでやれば良かった!』

怒りがおさまらない様子の笑里は、涙を流しながら地団駄じだんだを踏んだ。

その姿を見て、わたしは悟ったんだ。

——ああ、笑里はなんにも悪くない。

わたしが彼を信じたのがいけない。それなのに、わたしはさつき笑里を憎もうとした。自分のあさはかさにゾツとした。

笑里はわたしを思つて、怒つて泣いてくれている。

『ごめん……ごめんね、笑里……』

堪らず笑里に抱きつくくと、笑里もわたしを抱きしめ返した。身長百七十センチになつていた笑里と、百五十センチくらいなのわたしが抱き合う姿は、はたから見れば、まるで小さな子供がお母さんに甘えているような光景だつたと思う。

『バカ！ 愛理はなんにも悪くないでしょう！ 謝る必要なんかないよ！』  
違う。

感情に任せて笑里を罵つて、関係を壊すところだつた。

それを止めてくれたのは、零ちゃんだ。

わたしは笑里の細い腕の中から、零ちゃんを覗き見る。

零ちゃんはやれやれ、といった様子で、こちらを見ていた。

優しい優しい表情だつた。

『ありがとう、零ちゃん』

そう言うと、零ちゃんは目を瞠つて、それからクスツと笑つた。

わたしが何に對してお礼を言つたのかを、正確に理解してくれたんだろう。

零ちゃんは、わたしの中に潜む笑里へのコンプレックスを知っている。だから、それが爆発する前に止めてくれたんだ。

——零ちゃんが、好きだ。

ふいにそう思つた。

零ちゃんみたいになりたい。

こんな風に、大きく深く、大事な人を守る人になりたい。

——零ちゃんの隣にいられる人間になりたい。

わたしが彼に恋をした瞬間だつた。

それからのわたしの生活は、零ちゃん一色だつた。

ずっと傍にいたかつたし、彼のことばかり考えていた。高校は零ちゃんの通つていたところに進んだし、大学だって、同じところを目指すつもりだつた。

でも、それはわたしだけじゃなかった。

笑里も、零ちゃんに恋をしていたのだ。

笑里の恋はずつとずっと前から始まつていた。笑里自身に自覚があつたかはわからな  
い。でもわたしは知つていた。うんと小さい頃から、零ちゃんは笑里の王子様で、笑里



の目は零ちゃんにしか向けられていないことを。

笑里はすぐくキレイでモテるのに、誰とも付き合ったことがなかった。誰に告白されても、絶対に頷かない。一度なぜかって訊いてみたことがあったけど、答えは予想通りだった。

『だって、なんかピンと来なくて。零ちゃんの方がカッコイイでしょ？』

そりゃ、あれだけハイスベックな男の人が傍にいたら、同級生の男子なんか目に映らないのはわかる。わたしだってそうだった。そして以前のわたしと同じように、笑里もたぶん零ちゃんに自分が抱いている感情はプラコンの一種だと思いつ込んでいたのだろう。でも、ただの『お兄ちゃん』を、あんなに切なそうに見つめるわけがない。

笑里の目は、いつだって零ちゃんを追っていて、その黒目がちの瞳には、確かに恋心が宿っていた。

いつも笑里の傍にいて、一番笑里を知っているわたしが言うんだから、間違いない。でもわたしは笑里に何も訊かなかった。

わたしたちはとても仲の良い双子だった。お互いのことが手に取るようにわかってしまう。だから、どこかでバランスを取らなくてはならなかった。その方法の一つが、お互いのことに関して、本人が口にしなければ話題にしない、というものだったのだ。

零ちゃんへの恋心を自覚していない笑里に、わたしが何かを言うのは、ルール違反

だったし、そうすることで、零ちゃんを含めたわたしたち三人の関係が壊れてしまうのが怖かった。

わたしは、笑里が零ちゃんへの恋を自覚するのが怖くなった。

だって、笑里は特別だ。美人でスタイルが良くて、明るくて優しく、本当にスベシャル。皆が笑里を選ぶ。

零ちゃんは唯一、わたしたちを差別したりしないけど、それは、零ちゃんがわたしたちを『女』として見ていないからだ。

もし零ちゃんがわたしたちを『女性』として、見るときが来たら？ そしたら、きっと――

わたしは、その『とき』が来るのを恐れた。

だから、自分の想いもひた隠しにした。

零ちゃんにも笑里にも、絶対にバレないように、今まで通りに徹した。

わたしと笑里と零ちゃん。仲良しの双子と、お兄さん代わりの六つ年上の再従兄。

その関係を、崩さないように、壊さないように。

だけど、わたしの恋は高校三年の秋に終止符を打たれた。

零ちゃんの家の縁側で、呑気に居眠りをする笑里の髪に、零ちゃんがそっとキスするのを見てしまったから。

わたしが恐れてきた『とき』は、とっくの昔に訪れていたのだ。  
零ちゃんは、笑里を『女性』として見ていた。  
零ちゃんは、もう選んでいたんだ。  
わたしじゃなく、笑里を——

\* \* \*

その光景を目の当たりにした後、わたしはそつと踵きびすを返した。  
苦しかった。

でもそれ以上に、あの美しい情景を、壊したくなかった。  
だから気づかれないように、静かにその場を去った。

そして、わたしは自分の想いを心の深い場所に沈めた。

わたしは逃げたのだ。

笑里から。零ちゃんから。

自分の恋から。

その数ヶ月後、反対する笑里を押し切って、高校卒業を機に地元を離れた。  
以来、実家には一度も帰っていない。

笑里が芸能界で活躍していることや、零ちゃんと婚約して東京で一緒に暮らしていることは、親から聞いて知っている。それを聞いて、胸が痛まないと言ったら嘘になる。  
だから、会えない。まだ、会えないのだ。

——いつか。

胸の痛みが消えるまで。笑里、あなたを乗り越えられるまで。

わたしは未だ逃げ続けている。

笑里に会うのが、今もなお怖かった。

## 01 額に、祝福。首筋に、執着。

『WJJAジュエリーデザインアワード』

それは日本のジュエリーデザイナーの頂点を決定するべく、毎年開催されている権威あるコンテスト。つまりこのコンテストで賞を取れば、日本を代表するジュエリーデザイナーとして認められたことになるのだ。

デザイナー歴五年のわたしにとっても、WJJAは大きな目標だった。

わたしは地方のジュエリーデザイナー専門学校を卒業後、東京にあるデザイン会社、デア・デザインに就職した。最初は先輩デザイナーのアシスタントのような仕事から始め、ようやく自分のデザインを描かせてもらえるようになったのが三年目。ありがたいことに、わたしのデザインはお客様から好評を得たらしく、ほちほちと指名がかかるようになった。そして四年目からは、このコンテストにも作品を出すことを許された。

去年、初めて出品した作品は箸にも棒にもかからなかった。

そのことには大いにショックを受けたけれど、大賞を取った作品を生で見、「やられた！」と思った。

そこにあつたのは、ジュエリーであると同時に芸術だった。芸術——つまり、作家の意志や主張がぎゅちりと詰まったもの。

わたしは自分の作品を素晴らしいと思っていたけど、それはお客様——つまり買い手を意識して作られた、商品としての作品だったのだ。もちろん、ビジネスとなればそれは不可欠だ。でも、WJJAには必要なかったんだと実感した。

そうわかると、断然ワクワクした。

お客様のニーズに合わせてジュエリーを作るのだから、大好きだ。自分が作ったものを喜んでもらえることや、それを身に着けてもらえる喜びは何物にも代えがたい。

でも、純粹に自分の価値観や世界観を作品にぶつけることができると思うと、やっぱり、クリエイター魂に火が点くってものでしょう？

だからわたしはこの一年、WJJAのために案を練りまくった。日々の仕事の傍ら、時間を作ってはこのコンテストに向けて、作品を作っていたのだ。

そうしてネックレスとリングのセットを作り上げた。タイトルは『御法』。

源氏物語をイメージして作ったものだ。

『御法』は四十帖目、光源氏の最愛の妻、紫の上が亡くなるという、物語中で最も切ない場面だ。わたしはこの古の物語の中で、この帖が一番ドラマティックだと思っている。メインの石には、アンダリユサイトを使った。暗いオリーブ色に、オレンジやゴール

ドが混じるこの石は、複雑な色合いが趣き深い。その複雑さが、愛する人を失って千々に乱れる光源氏の心情を表すのにピッタリだった。

透明度が高くサイズが大きくなればなるほど、お値段も上がるけれど、透明度の高いものをやっとこさ入手した。ウチの会社は、コンテスト用の作品の制作費用は自分持ちなので、イメージ通りの石を手に入れるのは本当に大変だった。

でも苦勞しただけあって、作品の出来は満足のいくものになった。

三色のゴールドを使って平安絵巻の絢爛な雰囲気を出し、中心に角度によって色を変えるアンダリユサイトを置いた。光源氏の涙のようにちりばめたのは、白く輝くメレダイヤと儂い色の紫水晶。アメジストを選んだのは、その紫に最愛の女性、紫の上の気配を乗せたかったから。

イメージを形にするため、試行錯誤を繰り返し、ようやく仕上がったのはコンテストの締切一週間前だった。

自信はあった。

でもグランプリ受賞の知らせを電話で聞いた瞬間は、正直腰が抜けそうだった。

いつでも飄々として見えるらしいわたしが、受話器を握ったまま嬉し涙を流しているのを見て、社長はコーヒーの入ったマグを落としらしい。

そして今日、受賞式当日を迎えた。式は想像以上に立派なものだった。

国内で唯一のジュエリーデザインコンテスト、WJJAは注目度も高い。賞にはグランプリの他に、経済産業大臣賞や厚生労働大臣賞などといった大層な名を掲げたものもあり、審査員には日本有数の美術館の館長や大手ファッション誌の編集長、著名な大学教授などが招かれていて、各種メディアもかなりの数がやってきていた。

そんな中で、壇上に上がるなんていう経験は、わたしの地味な人生においては当然初めてのこと。ガチガチに緊張してしまい、トロフィーを受け取るだけで精一杯だった。受け取った瞬間、たくさんのフラッシュを浴び、目の前が真っ白に眩んだ。

受賞者スピーチでマイクを握らされてしまったけれど、パニックって何を言ったかは全然覚えていない。きつと支離滅裂な内容だったに違いない。できることなら、その場にいる人たち全員の記憶を抹消してしまいたいくらいだ。

その後は会場にて受賞パーティーとなり、グランプリを受賞したわたしにいろんな人が話しかけてきた。それらは当然仕事に繋がる可能性を秘めている。緊張しっぱなしだったが、なんとか応対を続けていた。

そんな中、背後から強い視線を感じた。

——なんだろう？

首筋がビリビリするような、強烈な刺激。

なんだかちよつと怖くなって、わたしはさりげなく振り返る。

ドクリ、と心臓が音を立てた。  
強烈な眼差しだった。

いや、眼差しだけじゃない。

その人自身が強烈な存在感を放っている。

視線の主は、背の高い男性だった。仕立ての良いスーツに身を包み、驚くほど整った容姿の二十代後半くらいらしい男性。唇の両端を緩く上げてしている微笑が、なんとも言えず甘い。

そんな彼の深い二重瞼の瞳は、ブラックスピネルのようだった。

漆黒の尖晶石——闇を凝縮したかのような混じり気のない黒は、他を寄せつけない煌めきで見る者を魅了する。

彼も、同じだった。

壮絶なまでの色気を放って、周囲の視線を釘づけにしている。

極上の美丈夫。

だけど、わたしは魅せられると同時に怖くなった。

黒尖晶石のキラリとしたその輝きは、抜き身の刃物のようでもある。

——あの男は、危険だ。  
とっさに、そう思った。

今まで、こんなにも心がざわついたことはなかった。

二十五年間の人生の中で、男性経験がないわけじゃない。それなりに、お付き合いをしてきた人もいる。

けれども、わたしはいつだって冷静だった。

誰かに溺れたりはない。

自分を制御できなくなるほどの強い感情は、わたしには必要ない。

もしそんな『想い』を抱いたら、己だけでなく、他人をも傷つけるだろう。

——大切な、笑里。

——大好きな、零ちゃん。

何よりも守りたい二人を思い出して、わたしは唇を噛んだ。

わたしは『恋』をしないと決めていた。

だから、見なかったことにした。あの男がわたしに視線を向けていたことも、その視線がやたら熱を帯びていたことも。

わたしは談笑していた相手に向き直った。目の前にいるのは、審査員だった経済産業大臣代理の小太りのおじさん。わたしはニコリと微笑んで、少々強引に会話を再開した。

「ええと、ごめんなさい、ちょっと背中にごミが。それで、なんでしたかしら？」

「ああ、工房はどちらなのかと」

「ああ、ええと、勤めているのはデア・デザインといって……」

ところが会話は、唐突に中断された。

低く甘いバリトンボイスによって――

「失礼。ちょっと彼女をお借りしても？」

そんな声掛けと共に、わたしとおじさんの間に長い腕が割り込んできた。

「え」

その腕はなんとわたしの腰を掴んだ。

仰天して顔を上げると、先ほどの美丈夫がわたしを見下ろして甘く笑っている。

「な……」

動転するわたしの代わりに、おじさんが憤慨して声を荒らげた。

「なんだね、君は！」

そりゃそうだ。話をしている人たちの間に割り込むなんて、無礼にもほどがある。

だが美丈夫は悪びれた様子もなく、おじさんに顔を向けた。

「申し訳ありません。彼女のご家族から緊急の連絡が入ったんです」

――え？

わたしはポカンとして彼を見た。

家族からの連絡？

両親ならば直接わたしに電話をかけてくるはずだ。

――笑里、かな？

今や『エミリ』として有名になった姉は、その美貌とイヤミのない天真爛漫さで、あつという間にお茶の間の人気者になってしまった。

有名人となった双子の姉と、わたしは今ほとんど連絡を取っていない。

――わたしが、逃げたから。

昏い考えに引き込まれそうになったけれど、慌てて平静を取り戻す。

この男に見覚えはないけど、もしこの人が芸能関係者で笑里の知り合いだとすれば、わたしを凝視していたのも頷ける。

おじさんは男の顔に見覚えがあったのか、あつと息を吞んで叫んだ。

「君、望月くんか！ あの、実業家の！」

「恐縮です」

「いやあ、噂は何っているよ！ この間修築した老舗ホテル、大評判だそうじゃないか！ 私もそのうち、家内と行こうと思っっているんだよ」

「ありがとうございます。お待ちしますよ」

「いやあ、君とは一度話してみたいと思っっていたんだよ。君は古い会社の再建にこだわっているようだが、それはどうしてなんだい？」

テカテカとした顔を綻ばせ、おじさんが言う。

「どうやらこのイケメン、有名な実業家のようだ。」

イケメンで実業家なんて、胡散臭いことこの上ない。

おじさんは話をしたがつっていたが、イケメンはやりわりと断った。

「それはまた、次の機会だ。今は彼女に伝えなくてはならないことがありますので……」

「おっ、そうか。そうだったな、それはいけない。どうぞどうぞ」

男はにっこりと艶やかな笑みを見せて礼を言い、「さあ」とわたしを連れ去った。

その所作が実にスマートで、わたしは言われるがままになつていったが、ハツとして男に訊ねた。

「あの、あなたはどちら様なんでしょう？ 笑里——姉の、知り合いなの？」

わたしの声に、美丈夫がこちらを見下ろして眉を上げた。

「名前は望月悠基、職業は……実業家、かな？ ちなみに、エミリちゃんとやらとは、

知り合いではないね」

「じゃあ家族からの連絡って」

すると男はクスッと笑った。

そんなキザな笑い方が様になるから、イケメンつてのは本当にタチが悪い。

「君、思ったより初心だね。あれは、君を攫うための嘘だよ。あのまんまじゃ自分、オ

レの番は回ってこなかった。オレ、せっかちなんだよ」

「——はあ？」

わたしは思わず声を上げた。

こいつ、とんでもない無礼者だ。

——ムカつく。

わたしはグツと足を踏ん張って、男の歩みを止めた。そして彼の腕を振り払って、男を睨み上げる。

「騙すなんて！ わたしは家族に何かあったのかって心配したのに！」

すると男は驚いたように目を丸くして、掌を顔の前に掲げて見せた。

「君と早く話してみたくて、いてもたってもいられなかつたんだ。ごめん」

あっさりと謝られて、わたしは調子が狂った。

こんなに素直に謝られると、敵愾心が緩んでしまう。わたしは気持ちを奮い立たせるために、さらに眉を吊り上げた。

「話してみたいからって、そんな子供みたいな……理由になりません」

「うん。そうだね。ごめん。……でも、君も悪いんだよ」

「は？」

イケメンの言い草に、わたしは声を荒らげた。

——わたしの何が悪いって言うんだ。  
すると男は、ブラックスピネルの瞳でわたしを射抜いた。  
ぎゅん、と心臓が縮こまる。

「さっきオレと目が合ったのに、君、わざと無視しただろう？　そういうの、危ないって知っておいた方がよい。男は逃げられると、追いたくなる生き物なんだ」

——しっ、知るかボケええええ!!

できればそう言って張り倒してやりたかった。でも、できなかった。情けないことに、わたしはこの男の醸し出す色気にやられていたのだ。

だって仕方ない。こんな色気を振りまかれたら、あの某国元首相の『鉄の女』だって蕩けるに決まってる。

——ダメだ。この男はフェロモンの塊だ！　危険過ぎる！

金魚みたいに口をパクパクさせるわたしに、男は目元を緩めた。

「この後は？」

「この後？」

「うん。何もなければ、オレと食事に……」

「お断りします！」

わたしは間髪いれず答えた。

このイケメンは危険人物だ。一分一秒でも一緒にいない方がよい。なのに、食事！　冗談じゃない。

「とにかく、わたし戻りますから」

逃げるが勝ち！　と身を翻そうとしたが、イケメンはしぶとかった。大きな手でがっちりわたしの手首を掴む。

——ちよ、おいおい！

ブンブンと手首を振ってみたが、外れない。

「は、放して」

「理由は？」

「なんの!？」

——むしろお前の行動の理由を説明しやがれ、こんちくしょう。

半分涙目のわたしに、男は剣呑な表情をして、肩を竦めた。

「オレと食事に行かない理由」

「行きたくないからですよ」

「なんで？」

「な、なんでって……!」

わたしは面くらった。——食事を断るのに理由があるのか。



啞然あだんとするわたしを尻目に、男は無駄に整った顔をぐっと近づけてきた。

——イヤイヤイヤイヤ！ 近い近い近い！

「オレは君と食事に行きたい。君ともっと一緒にいたい。君を、もっと知りたい」

——ちょ、お前もう黙れ！

茹でダコみたいになっている自覚があった。顔が熱い。

ここはまだ会場なのに、こんな公衆の面前で、このイケメンは何を言っているんだ！ 恥ずかしい。恥ずかしくて死ぬる。

ガツンと言ってやらないとわからないんだ！ と思い、男をギツと睨にらんだわたしの目に、赤いものが映った。

イケメンの首すじに、こっそりと咲いた、紅い花。

——キスマーク。

男性経験の少ないわたしにだって、それがまだ、真新しい痕きずだということはわかる。

つまりこの男は、誰かとベッドを共にしてから間もない。その直後、わたしにモーショをかけているってことだ。

——サイテー。

顔の熱が一気に引いていくのを感じた。

まあ、そうよね。こんなイケメンが、わたしなんかに声をかけること自体がおかしい

んだ。

何か目的があるのかもしれない。

わたしは冷たく言い放った。

「他にも女性はたくさんいますよ。あなたくらいハンサムなら、いくらだって……」

男はわたしの物言いに何か感じたのか、眉をひそめた。

「……オレは、君がいい」

「すみません、何を当たってください」

わたしは男の顔も見ずに言った。すると男は沈黙する。

「手、放してもらえますか？」

「……イヤだって言ったら？」

「はあ!？」

苛立つて顔を上げると、男は満足気な笑みを浮かべていた。

「やっとおレを見た」

「……なっ!」

一度引いた顔の熱が、再燃してしまう。わたしは意地でもこの手を振り払ってやろうと力を込めた。その瞬間、男が「あ」と言って、何かに気づいたような表情をしながら自分の口元を指差した。

「いこ」

——え？

口紅が落ちてしまったた!? と焦<sup>あせ</sup>って口に手をあてた瞬間、額<sup>ひたい</sup>に柔らかな感触があった。

ちゅ、と音がする。

「な、にを……」

呆<sup>ぼうぜん</sup>然とするわたしに、男は不思議そうな顔をした。

「え？ わからなかった？ じゃあもう一回」

ちゅ。

また音がした。今度はちゃんとわかった。自分が何をされたか。

わたしはガバツと額に手をやる。

こいつ！

わたしのオデコに、キスを……？

ヒューツと口笛が鳴り、周囲がワツと沸いた。

「な、な……!!」

公衆の面前だったことを、あまりのショックで失念してしまっていた。

「熱いねえ、お二人さん！」

「やるなあ、古川さん！」

周囲からからかわれ、わたしはいたたまれなくなって再びイケメンを睨<sup>にら</sup>んだ。

——あんたのせいだよっ！ どうしてくれるっ！

そういう意味を込めて。

それなのに、このイケメンはニヤリと口元<sup>くちが</sup>を歪<sup>ゆが</sup>ませて、

「祝福のキスだ」

と的外れなことを言った。

「受賞おめでとう、の意味だよ」

——おめでたいのはおまえの頭じゃボケえええええ！

気がついたら、イケメンに平手打ちをかましていた。

これが、わたしと悠基の出会いだった。

彼と、まさか一緒に仕事をすることになるなんて——まして、仮<sup>かり</sup>初<sup>はつ</sup>めにも抱き合う関係になるなんて……このときは想像もしていなかった。

## 02 耳朶に、誘惑。

WWJAのグランプリを受賞したおかげで、大きな仕事が舞い込んだ。

F県にある明治時代から続く老舗ホテル『汐騒館』からの依頼だった。

汐騒館は、かの鹿鳴館に似た外観の建物で、歴史を感じさせる重厚な雰囲気の人気のホテルだ。だが近年の不況のあおりを喰らって経営難に陥り、経営者は株と共に経営権を売り出した。新たに経営者となったのはやり手実業家らしく、旧従業員をそのまま雇用しつつも、教育係として優秀な人材を送り込むことで、新たなサービス体制を作り上げた。そのおかげで汐騒館は持ち直し始めているらしい。

その汐騒館で、ウエディングイベントの企画が持ち上がった。

古風な建物の雰囲気を活かした、新しいウエディングプランを提示することで、若い世代の集客を狙ったものだ。会場作り、花、料理、ドレス、アクセサリーにはその道で著名なスペシャリストを起用し、イベント当日にはメディアを呼んで大々的に宣伝をすることにしているらしい。かなり大がかりな企画のようだ。

わたしはなんとその一員に選ばれたのだ。

なんでも、新しく就任した経営者が、今回WWJAでグランプリを取ったわたしの作品を見て『ぜひ!』と熱いオファーをしてきたとのこと。

これはチャンス以外の何物でもない。

賞を取ってから、初の大仕事。これでいい仕事ができれば、わたしのジュエリーデザイナーとしての名が一気に広まるだろう。

わたしはこの仕事が好きだ。そして誇りを持っている。

キャリアアップできるチャンスは、絶対に逃したくない。

だから、社長からこの依頼について聞かされたとき、一も二も無く飛びついた。

絶対に、成功させてみせる!

わたしは意気込んで、F県へ向かう飛行機に乗った。

降り立った空港で、仰天させられる羽目になることも知らずに。

\* \* \*

——これは一体どういうことか!

目の前の光景が信じられず、わたしは何度も目を擦った。だけど目に映るものは変わらない。

ということとは……

「そんなに目を擦<sup>こす</sup>っても、オレは消えたりしないよ。残念だけど」

彼は皮肉気な笑みを口元に浮かべて言った。

「なっ……!」

「また会ったね、古川愛理ちゃん」

絶叫したい衝動をグッと抑えて、わたしは目の前のイケメン——受賞パーティーで、わたしのオデコにキスをかましたキザ男を睨<sup>にら</sup>みつけた。

涼しげな表情のイケメンは、今日はスーツではなくグレーのジャケットに、パーリーウッズの細身のパンツというラフなスタイルをしている。そして良く見れば、ジャケットの襟元には、白いフェルト素材の小さな花が咲いている。中央には、暗緑色の天然石。つていうか、ブートニエールなんて小洒落<sup>こしゃれ</sup>たものを実際につけてる人、初めて見たんですが。そして全く違和感がないんですが。イケメン恐るべし!

「あなた、何者なんですか」

わたしは心持ち緊張しながら、持っていたスーツケースの取っ手をぎゅっと握りしめた。

とても偶然とは思えない。東京から離れたこんな地方の空港で、この男と再会するなんて。

警戒するわたしとは逆に、男はひどく嬉しそうにニタリと笑った。

「君の雇い主、かな」

「——は？」

何言ってるのこの人。

目を点にするわたしに、イケメンはさらに追い打ちをかけた。

「君をここに呼んだのは、オレだ」

「イヤイヤイヤ、わたしはここに仕事に来たんですよ」

「知ってる。オレがその仕事の依頼主だ」

「……………え？」

顔からサーッと血の気が引くのがわかった。

そうだ。汐騒館は経営者が代わって、ヤリ手だという新任の人がこのイベントを企画したって……

「し、汐騒館の経営者が代わったって聞いたけど……」

まさか。

カクカクとロボットのような動きで見ると、男は実に満足そうに目を細めてこれ見よがしにゆっくりと頷<sup>うなず</sup>いた。

「望月悠基。汐騒館の新しい経営者です。よろしくね、愛理ちゃん」

うわああああ。

わたしは文字通り、頭を抱えた。初っ端からコレか。泣いても、いいだろうか。

だがしかし！ セクハラ上司なんざ、ごまんといる世の中だ。

古川愛理、二十五歳。雇い主がいけ好かない男だからといって、一度受けた仕事を投げ出すほど、お子様じゃあごさいません。この仕事を受ける前に、経営者がどんな人物なのかをちゃんと確認していなかったわたしにも非がある。

そんなわけで、わたしは今、いけ好かないイケメン——こと望月悠基のベンツの助手席に乗り込んでいる。Sクラスの真っ白なベンツ。……似合い過ぎてちよっと引いた。ムスツとして助手席に腰を落着けると、悠基は運転席からわたしに覆い被さるように身を乗り出してきた。

ふわりと鼻腔をくすぐるのは、甘過ぎないグリーンノート。これはきつと、エルメスの『ナイルの庭』だ。

「……ちよっと!!」

仰天して大きな体軀を押し戻そうとすると、その前に悠基の左腕がシュツと動いて、わたしの右脇に降りた。

——え？

拍子抜けしていると、カチン、と硬質な音が鼓膜に響いた。見下ろすと、骨ばった男らしい左手が、わたしのシートベルトの金具を留め具に収めている。

——シートベルトを締めてくれたんだ……  
ってイヤイヤ。そんなもん自分でできるけど。

反抗心と、勝手に勘違いした気恥ずかしさにものを言えないでいると、目の前にあった切れ長の目尻が下がった。

「このシートベルト、コツがいるんだ」

「ああ、そうなんですか」

わたしは動揺を隠すため、必死で無表情を作る。

けれど、この百戦錬磨のキザ男には、そんなわたしの心の内なんて手に取るようにわかるんだらう。

クスリ、と小さく笑われ、ムツとする間もなく、わたしの耳元にバリトンが吹き込まれた。

「キレイだね」

またからかわれたと思って睨みつけると、悠基は甘く笑んで、目尻をさらに下げた。さつきシートベルトを締めてくれた大きな左手が、わたしの耳たぶに触れる。

悠基はぶら下がっているサンストーンのピアスに触れた。

「さっきの『キレイ』はこのピアスに対しての言葉だったとわかると、怒りも冷めた。悠基の視線が、ピアスに注がれるのをわたしは黙って見つめていた。後から考えれば、このとき「やめてください」って叫べば良かったのに、わたしはバカみたいに彼の黒い瞳を眺めていた。

だって、キレイだったから。

濡れていて、澄んでいて、磨いたばかりのブラックスピネルのようだ。

その瞳が、くるっと動いてこちらに向けられ、わたしは我に返った。

目が合うと、悠基はわずかに目を細めた。その眼差しに、心臓がドキンと音を立てる。奥に熱を孕んだ、この表情。初めて会ったパーティー会場で向けてきたのと同じものだ。

切なげで——そう、まるで懐かしいものを見るかのような眼差し。

——どこかで、会ったことがあるとか？

そう考えてみたけど、わたしの記憶のどこを探してもこんなイケメンはいない。

じゃあなぜ、この人はこんな目でわたしを見るんだろう？

ほんやりと考えていると、悠基がつん、とピアスを優しく引つ張った。

「このピアスも君がデザインしたもの？」

わたしは頷いた。このサンストーンのピアスは、ゲン担ぎのためにここに来る直前に作ったものだ。

サンストーンは、『勝利の石』とも言われるから。

すると悠基はふっと表情を綻ばせた。そこには、さっきまでのからかうような色は欠片もなかった。

「さすがだな。見込んだ通りだ」

「え？」

「サンストーン……このシャンパンカラーは、オレゴン産だね。……君に良く似合う」  
甘味を帯びた声をかけられ、わたしはギョツとして身を引いた。

——油断も隙もない！

「お世辞は結構です」

身を振っても、悠基はピアスから手を離そうとしない。

「サンストーンの別名を知ってる？」

ジュエリーデザイナーのわたしを、バカにしているんだろうか。

「ヘリオライトでしょう？」

ムツとしながら答えると、悠基は片眉を上げた。

「そう。太陽神アポロンの石だ。さしずめ君は、アポロンに言い寄られて逃げる憐れな

乙女ダフネってところか」

——なんて、自信過剰な。

美しいダフネを見初めた太陽神アポロンが、嫌がる彼女に無理矢理迫るが、ダフネはアポロンから逃れるために月桂樹に姿を変える、というギリシャ神話のお話。

それにしても、自分を美貌の男神アポロンにたとえるなんて、この人は自分がイケメンだってわかっているんだろう。ちょっと腹が立つ。

「そうですね。今なら憐れなダフネの気持ちかわかる気がします。月桂樹になっても逃れたかったんでしようね」

大体わたしはダフネみたいな美女じゃない。

脳裏をよぎるのは、絹のような黒髪をなびかせて、キラキラの笑顔を見せる美貌の姉。

——笑里。

寶石みたいな笑里。ただの石ころなわたし。

だから、この人だって、わたしをからかっているだけなんだろう。

初めて会ったあのパーティーでだって、キスマークを首に付けてたじゃないか。

——惑わさないで。

「すみません、少し距離が近いんですが」

ピアスを弄っていた彼の指が、すっと耳の裏を撫でたので、わたしはついストレート

に文句を言ってしまった。仕事の依頼主にこんな口をきいてマズかっただろうかとヒヤリとしたが、よく考えればこの男の行為はセクハラだ。これくらい言ってもいいだろう。

「残念だけど」

妙に落ち着いた声に反応して顔を上げた瞬間、耳に温かな感触があった。

——え。

頬に彼の髪があたってチクチクする。グリーンノートが濃厚に香った。

ちゅ、というバードキスの音が、やたら卑猥に脳に響いた。

ぞくんと耳に甘い痺れが走る。

身を強張らせるわたしの耳に、悠基はもう一度だけ、ちゅ、とキスを落とす、ブラックスピネルの瞳でまっすぐに射抜いた。

「オレはアポロンほどマヌケじゃない。たとえ君が月桂樹になったって逃がしたりはしないから」

「っ……どういう意味」

ギッと睨みつけると、悠基はニヤリと笑った。

「鈍いね。オレは君が欲しいって言ってるんだ」

「欲しい？」

わたしは悠基の言葉をおうむ返しすることしかできなかった。

悠基はちょっと困った顔で笑う。

「そんなに意外だった？ 結構露骨なアプローチだったと思うんだけど」

「アプローチ……初対面でのデコチューや、今の耳チューのことですか？」

わたしの淡々とした口調に、悠基は苦笑を深めた。

「……まあそうかな」

「単なるセクハラだと思ってました」

「セクハラ……」

悠基が絶句するのを見て、わたしは愉快になった。自信満々の美丈夫が自分の言葉に動揺する姿なんて、滅多にお目にかかれるものじゃない。

思わずクスリと笑うと、悠基は拗ねたように唇をへの字に曲げた。

「結構人が悪いんだな」

「そうですか？ 率直に言っただけですよ」

「ひどい」

「どっちが」

テンポの良いやりとりが、小気味良かった。

と同時に、そんな自分に驚いてもいた。

わたしは基本的に非社交的な人間だ。

口下手で、他人となかなか仲良くなれない。

明るく誰とでも親しくなれる笑里とは正反対だ。

社会人になってからはさすがに少しは改善されたけど、誰かとこんな風に軽口を叩き合ったりすることは、ほとんどない。

まして、悠基はわたしの雇い主だ。

わきまえるべきだ、と頭ではわかっているのに、悠基とのこの気の置けない関係を壊したくないと思ってしまうている。

——いけない。

わたしは目を閉じて、自分の気持ちに歯止めをかける。  
ダメだ。これ以上欲してはいけない。

「……………君は」

悠基の静かな声が聞こえた。その声がまるで本当のわたしを探るように聞こえて、目を開けた。

——誰にも、入らせない。わたしの心の奥には。

目を開けると、眼前に漆黒の瞳があった。

ブラックスピネルの輝きを彷彿とさせる瞳は、今は真摯で、一途で、どこか切ない色をしていた。



——祈りのようだ。

そう思った。

昔、これと同じような目の色を見たことがある。  
忘れられない、あの光景。

この上なくキレイで、この上なく胸が痛い光景。

青年が、眠る少女を見つめている。とても優しげに。とても切なげに。

——零ちゃん。……笑里。

わたしの笑里。大好きで、大嫌いな、わたしの姉。

わたしは大いに動揺した。笑里を想うとき、決まって複雑な感情に襲われる。両極端の想いが寄せては引き、引いては寄せる。それは考えれば考えるほど心をざわつかせ、わたし自身を思考の坩堝<sup>つぼ</sup>へと呑み込んでしまう。

——ダメ。イヤだ。

その先には負の感情が待っている。どす黒く汚い感情。

「愛理」

昏い深淵<sup>くらしみん</sup>の一步手前でわたしを踏み止まらせたのは、わたしの名を呼ぶ低い声だった。ハツとして意識を現実に戻すと、悠基が眉根を寄せてこちらを見ていた。

「大丈夫か？　なんだかぼんやりとしていたが」

「……大丈夫です」

わたしはかろうじてそう告げた。

——イヤになる……

笑里のことを考えるたびに、こんな風になってしまいう自分に、ほとほと嫌気がさす。進歩がない。ちっとも前へ進めていない。

情けなさに、心が冷えた。

震えそうになる手を、ギュッと握る。

見えないように握った拳<sup>こぶし</sup>の上から、悠基が大きな手で覆<sup>おほ</sup>う。

とっさに振り払おうとした瞬間、じんわりとした温もりが伝わり、力が萎<sup>な</sup>えた。

温かい手。

胸にこみ上げる、この感情はなんだろう。

考える間も与えずに、悠基が言った。

「君が好きだ」

その台詞<sup>セリフ</sup>は静かだったけれど、ダイレクトにわたしの心に切り込んできた。

わたしは絶句した。

仕事仲間だからそんなことを言うべきではないとか、会ったばかりの人間に何を言ってるんだとか、そういう常識的な理屈が理由ではなかった。

ただ、動けなかったのだ。  
まるで蛇に睨まれた蛙だった。  
悠基は別に怒っているわけでも、威嚇しているわけでもない。  
ただ、わたしをまったく見ている。

その瞳が、恐ろしくキレイで、その美しさに動けなくなってしまうのだ。  
反応を示さず固まっているわたしに構わず、悠基は続けた。

「初めて見た瞬間から、君が欲しかった。オレと付き合ってほしい」  
わたしは呆然としたまま、悠基の言葉を繰り返した。

——わたしが、欲しい？ 付き合う？

その言葉は何度か脳の表面を上滑りした後、ようやく浸透した。

まずわたしが思ったことは、

——何をバカな。

だった。

「無理です」

即答し、悠基の手を振り払う。

彼はわたしの回答を予想していたのか、いささかの動揺も見せずにすぐさま訊ねてきた。

## 立ち読みサンプル はここまで

「なぜ？」

「なぜ？ よくそんなことが言えますね。あなた、恋人がいるでしょう？」

そうだ。悠基の首にあった所有の徴。あのキスマークを見たのは、つい二週間前だ。

悠基はわずかに首を傾げた。

「いない」

「嘘をつかないで。初めて会ったとき、あなたの首にあったキスマークを見てるんです」

唸るように言うと、悠基はフツと笑った。

「……ああ、それであるとき、急に態度が変わったのか」

わたしはカッととなった。

「最低ですね、恋人がいるくせに。悪いけれど、わたしは不誠実だとわかっている男性とお付き合いするほど、自虐的じゃな……」

わたしの非難は、ふいに口元に覆い被さった悠基の掌によって遮られた。

目を睨るわたしに、悠基は言った。子供に言い聞かせるような口調だった。

「恋人は、いない。確かに君と初めて会ったあの受賞式までは、そういう関係の女性はいた。だが、あの後すぐ別れたよ。——君と出会ってしまったから」

わたしは首を振って悠基の手から逃れた。